

移り気なハートをつかもう

慶應義塾大学経済学部経済学科 教授 大沼 あゆみ
(農業環境技術研究所 評議員)



埋蔵金、という歴史小説のような言葉をよく耳にするようになったが、この言葉にならえば埋蔵技術と名付けていいものが多い。すでに技術的には実現しているが、商品化できないものである。技術者の方は、いい技術なんです、いかに費用が…と言う。

埋蔵技術も、どうでもいいような機能（失礼!）を提供するものであれば、埋もれていても気にしないのだが、環境改善に効果的な技術も埋もれているとなると話が違ふ。これを何とか掘り出したいものである。

埋もれているとは、経済学では、市場で顕在化しない、という。顕在化しない理由は何だろうか。実は、先ほどの技術者のように、費用がかかるから、というのは正確ではない。競合する商品よりも費用がかかるものであっても、市場で顕在化しているものも沢山あるのである。

環境にいい技術を用いた生産物に対して、標準的な生産物より余分にかかるコスト（付加費用）をカバーするほどの収入が生まれれば、その生産物は市場で取引される。つまり、通常財との価格差（価格プレミアム）が、付加費用を十分大きく上回るものになることで、その技術は市場で活用されることになる。

経済学の一つの仕事は、望ましい技術をどのようにして市場で顕在化させるか工夫することにある。手取り早いやり方は、お金を出して付加費用を下げてやることだが、長期間となると、埋蔵金でもないし続かない。自律的に顕在化させるには、付加費用を下げる努力を行うだけでなく、価格プレミアムを拡大するために、需要サイドにどう訴えていくかが求められる。

私は、一昨年、兵庫県豊岡市のコウノトリ育む農法について調べてきた。

豊岡市は、2005年よりコウノトリの野生復帰を実現し放鳥数を増加させてきた。それを実現した要因に、コウノトリのエサとなる田圃の生物を一年中生息させ

るコウノトリ育む農法の拡大がある。これは、冬期湛水、深水管理、中干し延期、さらに農薬使用量を大幅に減らすなどの特徴を持つ農法であるが、労力が著しく増えるため、最初は採用する農家はごくわずかであった。環境に良い農法であっても、埋もれていたわけである。

ところが、この農法で生産されたコメに大きな価格プレミアムがついた。慣行農法で生産された但馬産コシヒカリと比較して、生産者価格（農協を通さず直接販売した場合）は、減農薬米で29%、無農薬で71%のプレミアムが発生した。収量は減るので、この価格プレミアムがそのまま反映されるのではないが、結果的に収入の十分な増加につながっていた。

付加費用はどうであろうか。労働時間では、慣行農法と比較して、減農薬は2.7倍、無農薬は3.8倍であった。一方で、農薬等が減ることで他の費用は減少していた。

こうしたもろもろの変化を合わせた結果、減農薬農法は慣行農法よりも利益が生じるが、無農薬農法では微妙であるという結果が出た。実際、減農薬農法の採用面積は急速に拡大していたのである。費用がかかる農法が、市場で急速に顕在化した例である。

しかし、まだまだわからないことが多い。少なくとも、十分な価格プレミアムを生むコメの需要面を調べなければならない。市場で評価されやすい減農薬、無農薬という要因だけではなく、生き物、とくに人気のあるコウノトリという生物が寄与している可能性もある。

生産の変化や技術の向上は、時間をかけてコツコツと積み重ねて行くものであるため、ある意味で明確な姿を見せてくれる。これに対し、消費者の需要は、移り気で突然変化する。しかし、環境にいい農法や技術で生産された農作物が、需要サイドで評価され高利益を得るようになれば、そうした農産物の生産が増え、農業を活性化させるだろう。そしてそれが、環境を改善していくことにつながるのである。